

オリゲネスの祈りににおける聖霊の参与

— 「聖なる者」にのみ限定される意味について—

梶原直美

序.

オリゲネスは、その著作『祈りについて』のなかで、祈りの重要性と必要性について説き、聖書を手掛かりに、祈りに関する彼自身の理解を提示している。そのさい彼が重要視するのは、単に祈ることではなく、「神にふさわしく禱る」こと、「神にふさわしいことを願って禱る」ことである。⁽¹⁾たとえば、この著作のなかでは、主の祈りが神にふさわしい祈りの「手本」として詳細に論じられている。⁽²⁾オリゲネスにとって「祈り」とは、「神にふさわしい」禱りを意味するに等しいものであると言える。

オリゲネスは、この「神にふさわしい禱り」のためには聖霊の働きかけないしは聖霊との関わりが不可欠であることを論じている。ただしその一方で、聖霊が与えられる対象は、それを受けるにふさわしい人にのみ限定されている。たとえば、物体の陰影に相当する「物質的恵み」でなく物体そのものに相当する「霊的恵み」を乞い求めるようすすめるなかで⁽³⁾、彼は巨大な怪魚を悪魔と理解し⁽⁴⁾、そこから逃れたヨナについて「ヨナのように、聖なる者として、聖霊[を受ける]にふさわしいものとなり」、怪魚の腹から逃れるのは誰なのか、と読者に問い掛けている。⁽⁵⁾これによると、ヨナのような「聖なる者」が、聖霊を受けるにふさわしい者なのである。聖なる者らは、禱ることによって、一義的な霊的なものを受け取ると同時に、二義的なもの、即ち身体的なものも与えられる。⁽⁶⁾聖なる人は聖霊を受け、それによって禱り、その禱りによって一義的なもののみならず、二義的なものをも受け得る。聖霊の参与する対象を、改心した

オリゲネスの祈りににおける聖霊の参与

者、キリストへの道を歩み神のうちに留まる者のみに限定するオリゲネスの傾向は、『祈りについて』のみに留まらず、一貫している。⁽⁷⁾とすれば、聖ではない者、改心しない者、キリストへの道に未だ到っていない者は、聖霊の働きを受け得ないのか。また、聖霊を受けないなら、祈ることもできないのか。その理由は何なのか。オリゲネス自身は、このことについて、これ以上明確に述べてはいない。

本論文においては、状況を祈りに限定し、すなわち、聖なる者ではない人に関して祈りへの可能性がどのように理解されていたのかという点について考察する。

以下において、まず、これらの点に関するこれまでの研究を辿る。次に、オリゲネス自身の論述について、詳細に考察する。さらに、そこに示されるキーワードから、オリゲネスの意図を探る。そして、最終的にオリゲネスがそこに何を理解していたのかを明示する。

1.

ゲッセルは、『祈りの神学 オリゲネスの「祈りについて」より』⁽⁸⁾という、オリゲネスの祈禱観に関する長い論文を著している。そのなかで彼は、オリゲネスの聖霊論の一般概念を辿ることによって、上に提示した問題を考察している。⁽⁹⁾

彼はまず、『祈りについて』14, 5における、聖霊の執り成しが聖なる人へのみ有効であるとするオリゲネスの主張をとりあげる。そして、その考えが、聖化が霊独自の働きであり、父があらゆる存在に、子が理性的存在に、そして聖霊が聖なる人々にのみ参与するというオリゲネスの理解に基づくものであることを指摘する。⁽¹⁰⁾さらに、ローマ8, 26-27の内容から、「執り成し」という働きを聖霊の最も重要な働きとして着目し、それを中心に、祈りににおけるオリゲネスの聖霊理解を論じている。ゲッセルは、聖なる人々に「執り成し」という聖霊の働きが限定されているのであり、その働きに基づいて、聖霊は御子キリストと併置されたり、あるいは御子に従属させられたりすると述べている。ここ

には、オリゲネスが本質的には聖霊を御子に従属するものと考えたのではないというゲッセルの理解が伺える。⁽¹¹⁾

最終的に、彼は、オリゲネスの考える聖霊の執り成しが、それを保証されている人々にのみ及ぶという考えのもとに、それが救いの経綸(Heilsoikonomie)という領域において働くことを示している。ただ、ゲッセルはこれに関する詳細な議論を展開しているわけではない。また、それが保証されていない人々に関しては、殆ど考察されていない。さらには、オリゲネス自身も執り成しを「聖霊に属するもの」とみなしていることには違いないが、ゲッセルのこの説は、霊の「執り成し」という働きにのみ限定されており、祈るなかで執り成し以外にも参与する聖霊について説明するには十分な内容となっていない。

次に、『神の霊と人 初期キリスト教の聖霊論研究』⁽¹²⁾という研究書において、アレクサンドリアのクレメンスやオリゲネス、またヴァレンティノス主義者など、初期キリスト教における聖霊理解を論じているホーシルトの研究を辿ってみたい。

彼は、オリゲネスに関して「オリゲネスにみる霊の働きと人間の完全性」という主題で六十五頁にわたる論述をなしている。⁽¹³⁾そのなかで、ホーシルトは、聖霊が与える聖性を、キリスト教徒の発展に見出されるものであると理解している。その発展とは、聖霊の助けのもとに道徳的な進歩としての洗礼に続く、回心において始まる過程を指す。そして、宗教的な知と霊の働きとの関わりのなかで、神の国への方向性は単に道徳的に禁欲的な事柄として現れるものとしてではなく、むしろ知的に(intellektuell)グノーシスのなかに現れるものとして理解されている。それと同時に、「霊的な者」は霊に基づく労苦との結びつきを通して、また、助け主キリストを通して、キリスト教徒になることが述べられている。この世の生活に背を向け、霊的に神の方を向くなかで、彼は、霊の本質としての、彼の本来の状態を回復する状態に置かれている。人は聖霊「を通して」進歩に到り、聖霊「において」神の視点に到る。ホーシルトは、霊的な人に「なること」は、本質的には道徳的、実践態度的な出来事であり、霊的

オリゲネスの祈りにおける聖霊の参与

な人の「存在」もまた、宗教的な知識 (Erkenntnis) 獲得を通して、特徴づけられるものであると理解している。

ホーシルトは以上のように、オリゲネスの聖霊理解を、人間の置かれた様々な霊的状态のなかで、その「働き」に焦点をあてて論じている。そして、聖霊は宗教的な認識とのなかでも論じられている。彼の研究は、とくにオリゲネスの祈禱観に焦点をあてて展開されているわけではないが、霊的な人に「なること」が実践的なこととして理解されると同時に、宗教的な知識獲得を伴うものとしても認識されていることは、祈禱との関わりにおいても示唆となり得るであろう。

最後に、バートルドの研究について触れておきたい。彼は、「オリゲネスと聖霊」⁽¹⁴⁾という論文のなかで、人間に、不可能なことを可能にする恵みをもたらすもの⁽¹⁵⁾としての聖霊理解を提示している。聖霊はキリストの存在を可能にし (*δύναμαι*)⁽¹⁶⁾、人間が祈ることを助け、ささげられた祈りを神に届ける⁽¹⁷⁾のである。

たしかに、“*δύναμαι*”という聖霊の働きについては、『祈りについて』序文においても言及されており、重要な点であると思われる。ただ、彼の短い論文のなかでは、その内容までもが十分に論じられているわけではない。

以上のような研究を踏まえて、ここで、オリゲネスが「神にふさわしい祈り」を強調しながら祈りにおける霊の参与をいかなるものと考えていたのか、彼自身の言葉をもとに考察する。

2.

「神にふさわしい禱り」を重視するオリゲネスの考え⁽¹⁸⁾については冒頭で述べた。彼は、「神にふさわしい禱り」を、その祈りの内容と祈る方法に関する記事によって説明している。ただ、その内容と方法自体は、引用された本来の聖句にはなく、オリゲネスの附加である。しかし、それ以後の叙述のなかでの彼

の関心は、この内容と方法の二点に置かれる。ここから、オリゲネスが、神へのふさわしい祈りとしての内容と方法に強い関心を持っていたことが考えられる。

オリゲネスはさらに、上に述べた神にふさわしい「内容」と「方法」を、「言葉」と「状態」⁽¹⁹⁾に関するものと言い換えている。

言葉に該当するものとしては、「大いなること」「天上のこと」を求める禱り、さらにはイエスによって命じられた禱りが聖書から例示され⁽²⁰⁾、それは祈りの内容そのものに関するものとして理解されている。状態については、男なら「清い手を挙げて怒ったり争ったりせず禱り」、女なら「慎みと貞淑とで身を飾」⁽²¹⁾って禱ること、ほかに恨んでいる人をゆるしてから禱ること⁽²²⁾など、やはり幾つかの例が聖書から引用されている。⁽²³⁾

オリゲネスは、『祈りについて』2, 3において、パウロの言葉から神にふさわしい禱りについて説明し、パウロでさえそれを実際には知り尽くしていなかったことを述べている。そして、その言葉を、パウロ同様、不足のある人が何によって補われるかを示すためであると理解している。オリゲネスは、その不足を補うのが「聖霊」であると述べている。⁽²⁴⁾ただし、パウロの言葉には聖霊が「聖なる人々のために」執り成すと書かれており、オリゲネスもこれを受け入れている。

この「言葉」と「状態」について、ゲッセルは、それらが魂のあり方を示すものであり、この言葉と状態のなかで準備をしながら魂自体が変えられることと理解している。⁽²⁵⁾そして、これは魂のあり方だけではなく神への関係にも適用され、人間の道徳的状态を表していることを指摘している。⁽²⁶⁾教師オリゲネスは、とくに徳を重んじ、自らの実践によって模範を示そうとした。⁽²⁷⁾彼はギリシャ四元徳を重視するが、それ以上に敬神の徳を最も重視したと見られる。この「徳」とは、物質的な身体の状態とは関係なく、非物質的な「精神の賢明さ、正義、節制、勇気、知恵、学知」といったものとして認識されている。そして、

オリゲネスの祈りにおける聖霊の参与

これらは「神の像」と考えられ、人間が努力し、神を模倣するとき、自己のうちに存在するものなのである。⁽²⁸⁾ただし、神の力なしに人は徳を身につけ得ず、そこに祈りの重要性が生じる。⁽²⁹⁾

オリゲネスはまた、主の祈りを注解する箇所において、罪の赦しを説明するさい、「使徒たちのように、イエスによって息を吹きかけられた者、また『実から』識別する能力のある者は、聖霊を受け入れ、霊的な者となっているので、聖霊によって導かれていることで、全ての点で神の子にふさわしい生活を言理に即して実践している者として」⁽³⁰⁾赦すか否かを決定する、と述べている。「イエスによって息を吹きかけられた者」というのは、聖霊を注がれた者のことである。⁽³¹⁾ゆえに、聖霊を注がれた者が「神の子にふさわしい生活をしている」ものとして理解されていることになる。また、オリゲネスは、弟子に赦しを教えるなかで『聖霊を受けなさい』⁽³²⁾と語るイエスの言葉をも引用している。⁽³³⁾つまり、これらの叙述には、聖霊を与えられることによってふさわしい生活の実践が可能になるという点との関わりにおいて、聖霊の働きが示されている。この、「神にふさわしい生活の実践」ということのなかに、祈りも含まれる。つまり、まずあるべき祈りへの第一歩としても、やはり聖霊の受領が重視されているのである。

祈るべき言葉と状態を述べるなかで、この聖霊の働きは、前述のゲッセルも指摘しているように、ひとつには呻きをとおして人間を神に執り成すものとして理解されている。しかもその執り成しは、「通常の呻きをもって」ではなく、「人間に語ることは許されない」、「言葉に表せない」⁽³⁴⁾呻きをもってなされるものであり、聖霊が、「人間に対する大きな愛と同情のゆえに」人間の呻きを自らに引き受けたものなのである。

さらに、オリゲネスは、聖霊が「単に執り成すことで満足せず」、「ありあまるばかりの執り成し」⁽³⁵⁾をすると語っている。それは、「勝ち得て余りがある」⁽³⁶⁾者らのためであり、その代表者としてパウロが挙げられている。このオリゲネ

スの言葉に、聖霊の執り成しの対象を、「勝ち得て余りあるほど大いなる者ではないが反対に敗北を喫するほどでもない [普通の意味で] 勝つ者ら」と、「勝ち得て余りある者」とに分けて、段階的に認識する傾向が見られる。そしてさらに、各々に対する聖霊の働きを、「[単なる] 執り成し」と、「ありあまるばかりの執り成し」とに分けて対応させている。このような段階的な理解は、『祈りについて』に関してのみならず、しばしばオリゲネスに指摘される。⁽³⁷⁾

執り成しに次ぐ、聖霊の働きに関することとして、オリゲネスはIコリント14,15を挙げている。彼は、霊が精神に先立って禱らない限り、人間の精神は禱ることができないことを主張する。そして、霊と精神で禱り歌うということが『祈りについて』のなかの二箇所ですすめられている。⁽³⁸⁾これらは、「霊と精神で禱る」ということが本来的な祈りであることを示すものであり、そのためには「聖なる人々の心の中で」霊が禱っている聖書の記事が引用されている。そして、「神の深みまでも究める⁽³⁹⁾霊」⁽⁴⁰⁾が「精神に先立って…禱らないかぎり、私たちの精神は禱ることは決してでき」ないという記述には、その強い否定「決してできない」があることから、オリゲネスが聖霊を精神に先立つもの、精神を導くものとして祈りに不可欠なものであると認識していることが理解される。

オリゲネスは、イエスに禱りを教わる前に独自に祈っていた弟子の祈りを「祈り」としては認めるが、弟子自身に「祈りの方法についてのより大いなる認識」がさらに必要であったと理解する。この記事は、文脈からその前の箇所、つまり、聖霊が精神に先立つということを説明するために置かれていることが明らかである。ここでは、「祈るべき方法を知らないという人間の弱さを自覚」していた弟子が、イエスの祈りの言葉によって、「特にそのことを知覚したので」、イエスに禱ることを教え(*διδάχῃ*)てくれるよう願って言ったのである。⁽⁴¹⁾これによってオリゲネスは何を言おうとしたのか。霊が精神に先立って禱ることが神にふさわしい禱りの前提条件とされる理由は、聖霊の性質にある。つまり「すべてを、神の深みまで究める」⁽⁴²⁾という聖霊の性質である。聖霊は「知っている」からこそ、先立つ必要があるのである。

オリゲネスの祈りにおける聖霊の参与

これらのことから、聖霊は祈りのさい、人間に祈るべき内容と状態を知らせ、人間に先立ち、そして人間を執り成すものと理解されていることがわかる。このとき、聖霊は、第一に神をも人間をも知り尽くしているので、人間には言葉になし得なくても呻きによってさえ執り成すことができ、また第二には、神を深みまで窮めているので、先立って人間を導く（案内する）ことができるのである。そして人間は、祈るべき内容と状態を知らなければ正しく祈り得ないのであるが、不足を自覚し、祈りについてのために自己を整えようとする人には、その知らない部分を聖霊が補う。

他方、オリゲネスは、先に述べた「状態」と同じ語“κατάστασις”を、別の箇所、祈りのための「心構え」として述べている。そこでは、「心構えに関することは魂に関連すべき問題である」⁽⁴³⁾り、沈黙し自らを整えるという心構えが注意深く熱心な祈りを可能にし、「手の代わりに魂（*ψυχή*）をあげ、目の代わりに精神（*νοῦς*）を神にあげ、立つ代わりに心の主導能力（*ἡγεμονικόν*）を地上のことどもから離し、万物の主のみ前にそれを立たせた者のごとくに、祈りに取りかか」⁽⁴⁴⁾ることを可能にすることが述べられている。

ここで、オリゲネスの語る「魂」「精神」「主導能力」について整理しておきたい。オリゲネスは、「魂とは *φανταστική* 及 *ὕδρμητική* な実体である」⁽⁴⁵⁾ると述べ、それはルフィヌスによって「認識力を有し（*sensibilitis*）、動くことのできる（*mobilis*）実体」⁽⁴⁶⁾と訳し換えられている。オリゲネスの理解によると、「魂」は精神が何らかの状態と品位から外れたものであり、それが改められ矯正されれば、精神としての元の状態に戻る。魂は、まだ救われてはいないが、救われつつあるものである。⁽⁴⁷⁾この「魂」理解は、そのギリシャ語の語源が「神的、優れた状態から冷えた」という意味であるとみなされていることによる。⁽⁴⁸⁾

他方、「精神」は霊とともに祈り、賛美し、完全さと救いを得るものとして理解されている。ランペによると、これは“mind”, “sense”のことであり、オリゲネスはその双方の意味に用い、なかでも、祈りおよび黙想のさいの精神として最もよく用いていることが指摘される。⁽⁴⁹⁾さらに、上述のオリゲネスの言

葉⁽⁵⁰⁾から、魂のあるべき状態と考えられていることが理解される。⁽⁵¹⁾

ヘーゲモニコン⁽⁵²⁾に関しては、魂や精神に関するほどの詳細な説明は見られない。訳語としては、“Vernunft”⁽⁵³⁾という独訳や、“reason”⁽⁵⁴⁾、“governing reason”⁽⁵⁵⁾といった英訳、また「主導能力」⁽⁵⁶⁾という和訳がみられる。ランペによると、その語は普通中性名詞として“*ψυχῆ*”と同様に理解され、元来ストア⁽⁵⁷⁾の用語であったがキリスト教世界において発展させられたものであり、内容的には魂の第一原理である「知性」(“intellect”)を意味するものである。⁽⁵⁸⁾また、オリゲネスが「主導権」⁽⁵⁹⁾の意味で用いていることも指摘されている。ゲッセルは、ロミエントの研究⁽⁶⁰⁾に従って、オリゲネスが人間の魂を上下の二部から構成されているものと理解し、さらにそのうちのヌース、ディアノイア⁽⁶¹⁾、ディアノエーティコン⁽⁶²⁾、カルディア⁽⁶³⁾に「ヘーゲモニコン」の名を用いていることを指摘している。そして、オリゲネスが、ルフィヌスとヒエロニムスによって“*principale cordis*”あるいは“*principale animae*”と翻訳されたヘーゲモニコンをヌースとして魂の上部の部分に用い、それを「神の像」への似姿の所在、観想、そして徳の部分、祈りを行う場として考えていたことを論じている。⁽⁶⁴⁾

小高もまた、「知的精神が神の像である」ゆえに、オリゲネスにとって「精神がある意味で神に類似するものである」と述べている。⁽⁶⁵⁾

以上のことから、オリゲネスが認識していたこととしては、魂の最上位にあるのがヘーゲモニコンであり、それは「知性」を意味し、「精神」とも呼ばれ、ここに「神の像」への似姿が所在する、ということが示される。ヘーゲモニコンはその知的性質によって神の似姿の所在として理解され得るのである。

ここから、とりわけ祈るさいの、以下のようなオリゲネスの考え方が明示される。つまり、祈りにあたって魂、精神、主導能力の活動がすべて神に向けられるとき、「知性」も神を目指しているのであり、その結果、精神は、その持つ神への似姿性によって、神に似る。それゆえ、神にふさわしい祈りをささげ得る。このように考えると、「知性」が非常に大きな重要性を持っていることが認識される。さらにオリゲネスは、「霊が禱っているので霊的なものである」禱

オリゲネスの祈りにおける聖霊の参与

りを、「霊によって生ぜしめられ、話られた祈りでもありますので、神の知恵の教えに満たされてい」るものとも述べているのである。

3.

ここで、これまでに浮上してきた聖霊と「知性」との関わりに、考察の視点を定めたい。

「知る」ということに関しては、それが非常に困難であること、しかし聖霊によってそれもまた可能になるということが述べられている。

オリゲネスは、『祈りについて』序文のなかで、「…この序文で、人間にとって不可能なことが神の恵みによって可能となるということについて述べるのはどうしてであろうと、いぶかしく思われることでしょう。」⁽⁶⁶⁾と述べている。彼が序文で目指したのは、「いとも偉大で、いとも遙かに人間を凌駕しており、わたしたちのもろい本性を越えており、言理に与かっているが死すべき [人] 類には把握し得ないことがありますが、わたしたちに対する計り知れない恵みの奉仕者イエス・キリストとその協働者なる [聖] 霊を通して、神のみ旨のままに、ふんだに、そして無制限に人々に神から注がれる神の恵みによって、それらは [把握] しようものとな」⁽⁶⁷⁾ることを説明するためであった。その先では、「私たちの弱さ (*ἀσθένεια*) を考えれば、祈りについて詳細に、そして神にふさわしくすべてを論じ、[祈り] とは何か、どのようにして祈るべきか、祈りにあたっては神に何を祈るべきか、どのような時が祈りに最もふさわしい時であるのか、といったことを明らかにするのは不可能なことの一つであるとわたしには思われるのです」⁽⁶⁸⁾と、「知る」ことの困難さが強調されている。これに対して、前述のように、キリストと協働者なる聖霊を通して把握しようものとなるという叙述もなされている。このうち、キリストに対しては、『知恵・義・聖め・あがないとされた』わたしたちの主キリストのおかげで、不可能なことが可能となった」⁽⁶⁹⁾「人間には主の精神を知覚し (*γινώσκω*)」得ないが、「このことすらキリストを通して恵んでくださる」⁽⁷⁰⁾と語り、「キリストの言葉を聞く者は、主の精神を知る (*οἶδα*)」⁽⁷¹⁾とも語られている。これは、パウロの言葉⁽⁷²⁾

に基づいており、そこにおいて「知る」は“*οἶδα*”である。聖霊については、神のことを『神の霊のほかだれも知っていない』が、「このことすらも可能になる」と述べ、その理由として『わたしたちは、この世の霊ではなく、神からの霊を受け』たからであると説明されている。さらに、その目的について、『神から恵みとしていただいたものをわたしたちが知る (*οἶδα*) ため』、『[この恵みについて] 語るのに、わたしたちは人間の知恵が教える言葉によらず、神の霊が教える言葉によって語る』のだと、パウロの言葉によって説明している。

ここでは、知恵 (*σοφία*) なるキリストによって、主の精神 (*νοῦς*) すなわち「意思」を知る (*γινώσκω*) ことができると言われている一方、霊によって神のことを知る (*οἶδα*) ことができると言われている。この“*γινώσκω*”と“*οἶδα*”はともに認識を表す動詞であり、これらの用語は聖書からの引用に基づくものであるが、オリゲネスには『祈りについて』序文において、引用以外の箇所においても、厳密にはではないが、この二つの用語を使い分ける傾向が見られる。すなわち、キリストには前者 (これには *οἶδα* が使われるときもある) が、聖霊には後者が使われる傾向にあるのである。そこで、オリゲネスがそれらをどのように区別していたのかに注目したい。

4.

まず、この二つの用語の語法について述べる。

キッテルによると、初期キリスト教世界では、“*γινώσκω*” (及び“*γνώσις*”) は通常の意味で知識 (knowledge) を指すものとして使用されていた。旧約聖書のギリシャ語や新約ギリシャ語においても、とくにこれに反する内容はない。⁽⁷³⁾これに対して、“*οἶδα*”については、それらが新約聖書において、見ることを意味する最もありふれた動詞のひとつであることが指摘される。見ることは聞くことと同様、目による証言、個人の体験、個々の確信を表す、感覚的、霊的知覚をも意味する。

教父のギリシャ語に関する理解をおおぐため、ランペの用語辞典を参照すると、“*γινώσκω*” はまず、知的あるいは感覚的な知識 (knowledge) によらない

オリゲネスの祈りにおける聖霊の参与

で神を知ることを意味する。また、神に関する人の知識に先立つ、人に関する神の知識をも指すものであることがわかる。⁽⁷⁴⁾これに対して“οἶδα”も知識 (knowledge) や承認 (acknowledge, recognize) を持つこと、あるいは神の知 (divine knowledge) を知る、といった内容を意味する。⁽⁷⁵⁾

有賀は『オリゲネス研究』において、オリゲネスがコリント I 12, 8 に基づいて、信仰を群衆に属するもの、グノーシスとソフィアを弟子たちに与えられるものと理解していることを述べている。⁽⁷⁶⁾そしてこの理由として、パウロがソフィアをグノーシスより高いものと認識していたことを挙げている。⁽⁷⁷⁾オリゲネスは「この知恵の食物によって、初めに造られた人間のように、健全かつ完全な者へと養われた精神は、再び『神の像及び似姿』⁽⁷⁸⁾となるように作り直される。」⁽⁷⁹⁾と述べている。ただし、有賀は、オリゲネスにソフィアをグノーシスと明確に区別する態度は伺えないことも指摘している。

また、グノーシスをテオーリアとも解し、見ることは知ることと一つであることを述べている。⁽⁸⁰⁾

以上の点を鑑みると、“γινώσκω”と“οἶδα”は双方とも知を表すものであるが、神の知がそれに先立つものとして内包されていると理解することができよう。双方の違いはそれの持つ意味そのものでなく、むしろ聖書で使用されている語法を踏襲していると考えられる。オリゲネスは、聖書から引用するさいにその語を変更する態度は殆ど伺えないからである。有賀が、ソフィアとグノーシスという重要な用語について、オリゲネスがその使い分けを明確な意図のもとに意識しているわけではないと述べているように、“γινώσκω”と“οἶδα”についても同様のことが言えるであろう。ただし、オリゲネスの神認識そのものについては、次のような言葉が見出される。「モーセも神を『見た』と考えるべきである。彼は肉眼で神を眺めたのではなく、心の視覚及び精神の知覚によって [神を] 理解したのである。」⁽⁸¹⁾やはり、認識に関しても肉肉的ではなく「心」や「精神」という霊的なものとして理解されているのである。これは、言うまでもなく、単に「知的」と言い換えることのできるものでもない。ここにも、先立つ神の知が存在する。

5.

以上のことから、聖霊には、人に先立つ神の知を人にもたらすという働きが重要な要素のひとつとして、オリゲネスに理解されていたことが示される。

ここで最後に、祈りにおいて聖霊の参与が保証され得ないという事柄に関して考察を進めたい。そのためにはまず、一般的に聖霊の参与がいかなるものとして理解されていたのかを明らかにする必要がある。

オリゲネスは、主の祈り注解部において「天にましますわれらの父よ」を論じるさい、神の存在が具体的な場所に限局されるのではないことを述べている。そしてさらに、「神は天にいまし、あなたは地上にいる」⁽⁸²⁾という聖書箇所を、場所的に限定される人間から、天使、聖霊、キリストまでの隔たりを示すものとして説明し、キリストを類比的に天と呼ばれ、教会を地と呼ばれるものと理解している。つまり、神と同様に、天使、聖霊、キリストは、物的に存在するのではないということである。オリゲネスは、「天にまします…」という言葉が、「神の存在性⁽⁸³⁾をあらゆる被造物から分かつこと」を意図しているものであると考えている。⁽⁸⁴⁾つまり人間が物質的存在であるのに対して、神が霊的存在であることを強調し、自らの思いをそのような神のもとに向けることが意図されていると考えている。オリゲネスは、「父よ」と最も親しく神に呼びかけるときにさえ、神と人間が絶対的に分かれていたということを忘れない。聖霊もまた、このように、祈りのさいに人間に関わる働きをなしながらも、その存在性は人間と絶対的な隔たりを持つ。⁽⁸⁵⁾

ただ彼は、そのように神の存在性を有していない、神と全く接点を持たないはずの人間に対しても、祈りにおいては「神性の流出」⁽⁸⁶⁾が生じると述べている。⁽⁸⁷⁾また、悟性 (*διανοητικόν*) の目は「神的で精神によって捉えうる、ある種の流れ出るものに与かる」⁽⁸⁸⁾と述べている。これは、霊に従うだけでなく、霊のうちにあるものとなった魂が、魂として存在することをやめて霊的なものになったからであると説明されている。では、祈りにおいて、人間は神と隔たれてはいないのか。聖なる者でなくても、聖霊の参与によって、神との関係の可

オリゲネスの祈りににおける聖霊の参与

能性は与えられているのか。

『宗教的探究の問題—古代キリスト教思想序説—』⁽⁸⁹⁾という著作のなかで、水垣は『ケルソス駁論』を取りあげ、オリゲネスのキリスト教理解の探究態度について論じている。そこでは、オリゲネスが、人間的智恵の神的智恵に対する連続性と非連続性を、二者択一のものではなく、相並ぶものとして考えていること、また、それはケルソス駁論のみならず、彼の思想全体に共通するという理解を提示している。⁽⁹⁰⁾つまり、水垣は、この連続性と非連続性が共存するなかにも、キリスト教は、探究する意味を持ちうるものとの見解を示しているのである。⁽⁹¹⁾この考察は示唆深い。つまり、知に関わる聖霊の、人への参与もまた、「有無」ではなく、多段階において理解されていることが考えられるのである。

オリゲネスは、前述のように、祈りにおいてだけ、神と人間とは、質において接点を有する可能性が開かれていると述べている。聖霊もやはりこれと同様、祈りにおいてのみ、「知」をとおして、人間と関わりを密にする可能性が与えられていると考え得る。聖霊は、人間から、あるいは人間は聖霊から隔離されているのではない。むしろ「全世界に満ちている主の霊」が語られているのである。⁽⁹²⁾

結.

われわれは、聖霊が人間を祈りに導く第一歩として、聖霊の参与ということについて考えてきた。オリゲネスは聖霊の参与を「神にふさわしい」者に限定し、聖霊は人間に神を「知る」ことを賦与する。聖霊によって人間は神の似姿性のゆえ神に近づき、徳の実践が可能となる。これは、オリゲネスにおいて、次の二つの考え方のなかで展開されていることが明らかとなった。

まず、聖霊が神と同様、人間とは完全に隔絶された存在であるということである。人間は本来、聖霊との接点を全く持つことができない。ただし、ある条件を満たす「神にふさわしい」者のみが、聖霊の参与を受け、神を知らされ得るのである。祈りに関しても、「神にふさわしい」者のみにその言葉と状態が知

らされるのである。

ふたつめには、隔絶された神は、祈りにおいてのみ人間へと流出し、その存在が与えられるということである。聖霊もまた物質的な性質を持つ人間とは異質の存在である。しかし、祈りにおいて人間にその存在を与え、人間とともにいることができるのである。ゆえに、祈りにおいて、そして聖霊の参与を受けた「神にふさわしい者」にのみ、神は与えられる。

ただし、神へのふさわしさは全か無かという基準でなく、段階状に考えられている。それは、以下のオリゲネスの言葉に示されるように、神の像の刻印はどんな人間に関しても否定されていない。「人間のうちに神の像の刻印が明らかに認知される。それも朽ち果てる身体の形態に見られるものではなく、精神の賢明さ、正義、節制、勇気、知恵、学知、その他もろもろの徳の総体に見られるのである。これらのすべては、実体として神のうちに存在するが、人間が努力し、神を模倣するなら、それらの徳は人間のうちに存しうるのである。」⁽⁹³⁾

以上のことから、オリゲネスは、『祈りについて』のなかで、神にふさわしい祈りをささげる可能性を聖なる人々に限定し、聖ならざる者にはそれを否定するということを提示しているのではないことが考えられる。彼は、祈りという実践に関わる人間を二種類に分けて考えたのではなく、むしろ、方向性として、聖ならざる方向から聖なる方向への進歩を強くすすめることを意図していたことが考えられる。つまり、聖霊は、その人間個人の程度に応じて神を知らせ、祈りの言葉、態度を教える。実際の人間には誰にでも、聖霊の参与が与えられる。ここから、オリゲネスの実際の視野のなかにあったのが彼自身をも含む一部の高德の人だけではなく、人間として生まれたすべての存在者であったことが明らかとなった。すべての人が例外なく聖霊の働きによって祈りへと向かわせられる、これが祈りに対するオリゲネスの前提ではなかっただろうか。

オリゲネスの祈りににおける聖霊の参与

【注】

オリゲネスの著作とその校訂本に関して、以下の表記を用いる。

CC：『ケルソス駁論』

PA：『諸原理について』

PE：『祈りについて』

HomCnt：『雅歌講話』

HomJer：『エレミヤ書講話』

HomJos：『ヨシュア記講話』

ComMt：『マタイ福音書注解』

GCS： *Die griechischen christlichen Schriftsteller der erst Jahrhunderte*,
Berlin 1887ff.

Görgemanns-Karpp： *Origenes vier Bücher von den Prinzipien*, hrsg.,
übers., mit krit. u. erl. Anm. vers. von Herwig Görgemanns u.
Heinrich Karpp, Darmstadt 1976.

- (1) PE 1, 2 (GCS 3, 299, 11-16).
- (2) PE 18, 1-30, 3 (GCS 3, 340, 3-395, 12).
- (3) オリゲネスは、物質的恵みは霊的恵みに付随するものであると説明する。
PE 16, 2 (GCS 3, 336, 21-337, 17).
- (4) 小高毅は、オリゲネスの『ヨハネ福音注解』 I, 17, 95-98における論述から、この「巨大な魚」を「レビヤタン」(Jb 3, 8) であり、悪魔であると説明している。『祈りについて』、小高の訳注53、参照。PA II, 8, 3 (Görgemanns-Karpp, 156, 22-157, 12) Cf. Rev. 12, 9 ; 20, 2.
- (5) PE 16, 3 (GCS 3, 337, 2-5).
- (6) PE 16, 2 (GCS 3, 336, 24-25).
- (7) たとえば、「それ [聖霊] は人間全般にではなく、聖人にだけ与えられたものと理解せねばならない。」(PA I 3, 6[Görgemanns-Karpp, 58, 5-6].) ; 「聖霊は聖なる人々にのみ与えられる」(PA I, 3, 7 [Ibid, 59. 16-17]) など。
- (8) W. Gessel, *Die Theologie des Gebetes nach >De Oratione< von Origenes*, München/ Paderborn/Wien 1975.
- (9) W. Gessel, op. cit., pp.122-125.

- (10) Cf. PA I, 3, 8 (Görgemanns-Karpp, 61, 5-7). Cf. W.Gessel, op. cit., p.125 n58.
- (11) オリゲネスの教説に従属説的な表現が見られることに関して、小高は、それが質的な従属ではなく、「源」と「源から発出する」ものとしての従属関係であると理解している。小高毅『オリゲネス—「ヨハネによる福音注解」研究』、創文社 1984年、134頁以下、参照。
- (12) Wolf-Dieter Hauschild, *Gottes Geist und der Mensch Studien zur frühchristlichen Pneumatologie*, 1972 München.
- (13) Ibid., pp.86-150.
- (14) George C. Berthold, "Origen and the Holy Spirit", *Origeniana Quinta*, pp.444-448.
- (15) Cf. ibid., n26.
- (16) HomJer 1, 12 ; Cf. ComMt XIII, 15. Cf. ibid, n24.
- (17) HomJos 9, 3. Cf. ibid., n25.
- (18) PE 2, 1 (GCS 3, 299, 11-13). オリゲネスは「神にふさわしい」(*καθὸ θεῖ*)という言葉をしばしば用いている。ただし、彼は「ふさわしい祈り」について体系的に述べているわけではない。これについてはゲッセルも指摘している。彼はさらに、オリゲネスの述べる「ふさわしい祈り」に関する体系的な分析は、彼の祈禱観に対する誤った理解を生じかねないと注意を促しながらも、その価値を認めている。Cf. W.Gessel, op. cit., p.128.
- (19) “*καταστάσις*”. ランペによれば、落ち着いた規律正しい平和的な状態、あるいは、個人の精神的道徳的状态を示すものとされている。Cf. G.W.H. Lampe, op. cit., 720 l-r. また、オリゲネスは、「状態」を表すものとして“*διάθεσις*”も挙げている。(PE 8, 1 [GCS 3, 316, 25] 「…それにふさわしい状態で、それにふさわしく祈り、それにふさわしく信じていないなら、また祈りに先立って、それにふさわしいような生活方法で生きていないなら、手に入れたいもののあれやこれやを [得ることは不可能です]。’) この用語は、意志や目的という側面に関する傾向や態度という意味に解される。

オリゲネスの祈りにおける聖霊の参与

Ibid, 347r.

- (20) 「大いなること」という言葉は、新約聖書には見られないが、小高はアレクサンドリアのクレメンスもまた言及している言葉であることを指摘している。(『祈りについて』小高訳注3、参照。)「天上のこと」については、Lk 12, 31、参照。
- (21) I Tim 2, 8-10.
- (22) Mk 11, 25.
- (23) PE 2, 2 (GCS 3, 299, 17-18).
- (24) Rom 8, 26-27.
- (25) Cf. “καὶ τὸ μὲν τῆς καταστάσεως εἰς τὴν ψυχὴν ἐγκαταθετέον”. : PE 31, 1 (GCS 3, 395, 18f.). Cf. W. Gessel, op. cit., p.137. オリゲネスは PE 31, 1 以下で祈りについて述べるさい、心構えに関することを「魂に関連すべき問題である」と述べ、同 2, 2 で触れた事柄について、再度言及している。
- (26) Cf. W.Gessel, op. cit., 137, n63. また、ゲッセルはここで、“καταστάσις” (“Gesinnung”. Cf. PE 8, 1 [GCS 3, 316, 25] .)も、正しい内的状態で祈りに臨むときに与えられると述べている。Ibid., 137 n66. PE 19, 1 (GCS 3, 341, 12f.).リーゼンフーバーは、古代キリスト教そのものが、「徳を優先させる人間像の実践的深化」を目指したと評価している。それは、ギリシャ的な理想や知を重んじる傾向から生じてきた方向性であり、徳はイエスを模範とされた。(K. リーゼンフーバー著、酒井一郎訳「古代キリスト教の教育思想 概説」上智大学中世思想研究所編『古代キリスト教の教育思想』、東洋館出版社 1984年、²1990、17-18頁、参照。)また、ネメシエギは、オリゲネスについて、彼が、崇高な教えを説く一方で実際はそれと程遠い生活をしていたギリシャ哲学者たちでなく、彼らより無学であっても宗教的にも道徳的にも優れた生き方をしたイエスに倣う多くのキリスト者のうちに、「神の力」の働きを読み取っていたと述べている。(P. ネメシエギ「オリゲネス」同上、182-183頁、および、P. ネメシエギ「オリゲネスにおけるプラトン主義」上智大学中世思想研究所編『キリスト教的プラ

トン主義』、創文社 1985年、4-5頁、参照。)

- (27) 同様の理解が多く見られる。たとえば、有賀は「単に信者となって教会員となることが即救いなのではない。完成を目指して絶間ない努力をすることが肝心である」(有賀鐵太郎『オリゲネス研究』(有賀鐵太郎著作集 I)、長崎書店 1943年、302頁)と述べている。
- (28) PA IV, 4, 10 (Görgemanns-Karpp, 363, 19-24.) : 「人間のうちに神の像の刻印が明らかに認知される。それも朽ち果てる身体の形態に見られるものではなく、精神の賢明さ、正義、節制、勇気、知恵、学知、その他もろもろの徳の総体に見られるのである。これらのすべては、実体として神のうちに存在するが、人間が努力し、神を模倣するなら、それらの徳は人間のうちに存しうるのである。」
- (29) 「最も必要なことは神の事柄を理解させる恵みを神に祈り求めることです。言っただけではなく、『求めなさい。そうすれば、神がくださる』とも言ったのである。」(Lettre..., 4 [3] .ある学生宛ての手紙；同上、188-189頁、参照。
- (30) PE 28, 8 (GCS 3, 380, 5-13).
- (31) Cf. PA I, 3, 7 (Görgemanns-Karpp, 58, 7-21). Cf. Ps 104, 29-30.
- (32) PE 28, 9 (GCS 3, 380, 16-19). Cf. Jn 20, 22.
- (33) PE 28, 8 (GCS 3, 380, 8-11).
- (34) II Cor 12, 4.
- (35) “*ὑπερευτυχάνω*”. ローマ 8, 37の“*ὑπερνικάω*” (勝ち得て余りがある) に倣い、“*ὑπέρ*” (越えて、以上に) の意味を強調する。『祈りについて』、小高訳注五、参照。
- (36) Rom 8, 37.
- (37) W. Gessel, op. cit., pp.91-94.
- (38) PE 2, 4 (GCS 3, 301, 27-302, 6); 12, 1 (GCS 3, 324, 13-20). ほかに、『諸原理について』これはまた、『諸原理について』のなかでも、キリスト、天使そして聖人もわれわれとともに禱ることが述べられた後、提示される。そ

オリゲネスの祈りにおける聖霊の参与

の直前で「…パウロは魂よりも精神を聖霊に結びつけているのである。」と述べている。 PA II, 8, 2 (Görgemanns-Karpp, 155, 1-6).

- (39) “ἐρευνᾶω”.
- (40) I Cor 2, 10.
- (41) PE 2, 4 (GCS 3, 302, 6-11).
- (42) PE 2, 4 (GCS 3, 302, 4). Cf. I Cor 2, 10.
- (43) PE 31, 1 (GCS 3, 395, 18-19).
- (44) PE 31, 2 (GCS 3, 396, 2-6).
- (45) PA II, 8, 1 (Görgemanns-Karpp, 152, 20.)
- (46) PA II, 8, 1 (Ibid., 152, 21-22).
- (47) PA II, 8, 3 (Ibid., 156, 5-6).
- (48) PA II, 8, 3 (Ibid., 157, 12-16).
- (49) G.W.H. Lampe, ‘νοῦς’, *A Patristic Greek Lexicon*, Oxford 1987, 1961, pp.9231-9271.
- (50) PA II, 8, 3 (Görgemanns-Karpp, 156, 5-6).
- (51) Cf. PA II, 8, 3: 「あるいは、…失われた状態から解放された後には、失われて魂と言われるに至る前の存在に再び戻ることができる」
- (52) “ἡγεμονικόν”. ラテン語では “principalis animi pars”、つまり魂に関する領域として認識されていたことがわかる。
- (53) W. Gessel, op. cit., p.139.
- (54) J.E.L. Oulton-H. Chadwick, *Alexandrian Christinity, On Prayer*, LCC2, London 1954, p.323.
- (55) Rowan. A. Greer, *ORIGEN An Exhortation to Martyrdom, Prayer and Selected Works*, New York 1979, p.164.
- (56) PE 12, 1 (小高毅訳、72頁)；13, 3 (同訳、75頁)；31, 2 (同訳、149頁)。
- (57) ただし、オリゲネス自身は霊について、キリスト教のそれとストアのそれとは異なったものであることを述べている。 Cf. CC VI, 71.
- (58) G.W.H. Lampe, “ἡγεμονικός”, op. cit., pp.599r-601l.

- (59) ComCnt 1.
- (60) G. Lomiento, *L'esegesi origeniana del vangelo di Luca*, 29 n13. Cf. W. Gessel, *op. cit.*, 138 n76.
- (61) “*διάνοια*”. ランペはこれについて言及していないが、新約聖書では知能、理解、認識能力、考え方、心などの意味で用いられていたようである。
- (62) “*διανοητικόν*”. ランペは言及していない。オリゲネスもこれに言及し、小高は「悟性」と訳している。Cf. PE 9, 2 (GCS 3, 318, 27).
- (63) “*καρδίᾳ*”. ランペによると、“heart”, “mind”, “soul” と理解されている。(G.W.H. Lampe, “*καρδίᾳ*”, *op. cit.*, 702r-703r.) オリゲネスは著作のなかで、そのすべての意味に用いているが、『祈りについて』のなかでは“soul”として、とりわけ道徳的な行為の源を指している。小高はこれを「心」と邦訳している。
- (64) W. Gessel, *op. cit.*, 138f.
- (65) 小高毅『オリゲネス—「ヨハネによる福音注解」研究』、創文社 1984年、109頁。
- (66) PE 2, 1 (GCS 3, 298, 20-23).
- (67) PE 1 (GCS 297, 1-6).
- (68) PE 2,1 (GCS 3, 298, 23-299, 3).
- (69) PE 1 (GCS 3, 8-9).
- (70) PE 1 (GCS 3, 298, 1-2).
- (71) 「知っている」「理解する」「認める」。“*γινώσκω*”との区別はヘレニズムギリシャ語においては強調できないとされる。
- (72) I Cor 2, 12-13.
- (73) G. Kittel, *Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament*, 1 Bd, Stuttgart 1957.
- (74) G.W. Lampe, “*γινώσκω*”, *op. cit.*, p.315r.
- (75) Cf. CC 7, 44 ; G.W. Lampe, “*οἶδα*”, *op. cit.*, pp.936r-937l.
- (76) 有賀鐵太郎、前掲書、335頁。

オリゲネスの祈りににおける聖霊の参与

- (77) CC VI, 13.
- (78) Gen 1, 26.
- (79) PA II, 11, 3 (Görgemanns-Karpp, 186, 11-13).
- (80) PA II, 4, 3. 有賀鐵太郎、前掲書、343頁。
- (81) PA II, 4, 3 (Görgemanns-Karpp, 131, 3-5): “Hoc ergo modo etiam Moyses deum vidisse putandus est, non oculis eum carnalibus intuens, sed visu cordis ac sensu mentis intellegens, et hoc ex patre aliqua.”
- (82) Eccles 5, 1.
- (83) “*οὐσίᾳ*”.
- (84) PE 23, 5 (GCS 3, 353, 10-11).
- (85) PE 23, 4 (GCS 3, 342, 20-353, 1). 「神は上なる天におられ、あなたは下なる地にいるからである」という言葉は、「みじめな体のうちにある者らから、言理の恩沢によって高められた天使ら、聖なる霊たち、あるいはキリストそのかたのもとにあるかたまでの隔たりを明らかにしようとしているのです。」
- (86) Wisd 7, 25.
- (87) PE 23, 5 (GCS 3, 353, 12f.).
- (88) PE 9, 2 (GCS 3, 319, 2).
- (89) 水垣涉『宗教的探究の問題—古代キリスト教思想序説—』、創文社 1984年。
- (90) 同上、281-282頁。
- (91) 同上、282-3頁、参照。
- (92) PE 10, 2 (GCS 3, 320, 12-16). Cf. Ier 23, 24. ここで、「満ちる」と訳される“*πληρόω*”は、引用されているエレミヤ23章24節 (LXX) のものと一致し、エレミヤ書において表現されている「共にいる」神という理解が含まれているものと考えられる。
- (93) PA IV, 4, 10 (Görgemanns-Karpp, 363, 11-24).